

# イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授  
小田島 恒志

(第28回)

回りくどい言い方だと、おそらく、  
言えないこともない表現

カズオ・イシグロの大ヒット小説『日の名残り』の中にこんな表現がある — 「…ミス・ケントンが、まさにその瞬間にも、ほんの数フィート先で（扉の向こう側で）、実際に泣いているということも、あり得ないことではなかった…」この「あり得ないことではなかった (not impossible)」という表現が気になった。どうして「ということもあり得た」と言わないのか。だが、しばらくイギリスで過ごしているうちに、こういう言い回しが普通に使われていることに気づいた。「日の名残り」は、貴族の屋敷に仕えていた執事の回想話という語りのスタイルなので、特にイギリス的な言い回しが多い。直接的に、明確に、言いたいことをはっきりと述べるアメリカ英語を学校で教わってきた我々には、なんとも回りくどく聞こえるのだが、慣れてくるとこれが楽しい。自分で使ってみるとイギリス人になったような気になれる、と言えないこともない。

『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』で、トリローニー先生の授業中に、ロンが発した一言が原因でクラス全員に宿題が出される場面がある。ロンは、天体図を見ていたラベンダーという女の子に「ほくにも天王星を見せてよ」と言っただけ

なのだが、その後に「残念なことに、これがトリローニー先生に聞こえてしまい、そのせいで、授業の終わりにクラス全員に宿題が出されることになった」とある。天王星 (Uranus) はローマ神話の神の名だからローマ字読みすれば分かるように、「ウラノス」である。だが、イギリス人はこれを英語で発音するので「Ur」の部分は「Your」と同じ発音になってしまい、Your/anusと聞こえた先生が厳しく生徒たちを罰したわけだ。しかし、これはいささか理不尽な話である。占星術に関する授業中なのだから、この単語の音を耳にしたら、当然先生も「Uranus」のことだと思うはずだ。「水戸黄門」と聞いて、その言葉の同音異義語を連想してきゃあきゃあ騒ぐのは小学生低学年どまりで、中学の「歴史」の時間に出てきても誰も気にはしない。そう思って、当該箇所を読み直してみても気がついた。「そのせいで…宿題が出されることになった」のところに「おそらく (= perhaps)」と一言挿入されているのだ。なるほど、宿題が出た原因の真相は分からないが、おそらく、このせいだろう、というわけか…おそらく。一言入れただけで印象が変わる。これもまたイギリス的だということもあり得ないことではない。